

## 2020年3月8日 説教「嵐の中にも」

マルコの福音書 4章 35-41節

マルコの福音書 4章からイエスのなされた事から学びましょう。

### 1. ガリラヤ湖の向こう岸に (35-36節)

- ①向こう岸へ (35)「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう』と言われた。」ガリラヤ伝道において、ガリラヤ湖は集まりやすい格好の場所でした。群衆のゆえに、舟の上に載られて、イエス・キリストは説教をされました。多くはたとえをもって人々に語られました。先日学んだ、四つの種の話もその時のものです。そのほかにもいくつかの教えをされました。さて、その日のことです。時は夕方、イエスは弟子たちに、湖の西側カペナウムから向こう岸に渡るとことを提案されました。
- ②舟に乗って (36)「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。」イエスの弟子たちの中には漁師が四人もいました。ペテロとアンデレ兄弟、ヤコブとヨハネ兄弟です。彼らはそれなりの年月、そこで漁をしてきたのですから、ガリラヤ湖について、舟の操りについてはよく知っていました。そこで、弟子たちは、その申し出を二つ返事で引き受けて、小舟にとって向こう岸を目指して舟を出しました。群衆は、その舟を見送ることになりました。
- ③他の舟も (36)「他の舟もイエスについて行った。」もっとも、イエスの舟だけでなく、他の舟もイエスの乗る舟のあとを追っていきました。追った舟とそこに乗った人々のこと、その後の彼らについては、この記事には何も記されていません。

### 2. 嵐という試練 (37-38節)

- ①激しい突風が (37)「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。」ガリラヤ湖はテベリヤ湖ともいわれました。ヨルダン川南の死海とは違って、淡水湖でしたから、魚が生息し、この湖で漁などの生活をする人々がいました。周りは多く丘陵ですが、北西部はなだらかでその周辺に町がありました。この湖の北西にはヘルモンなどの山がありました。4ページの地図をご覧ください。ガリラヤ湖面は地中海の海面より212メートルも低いのです。ガリラヤ湖はすり鉢のような状態になっています。気温の変化によって、地中海からの海風が山を越えて、突風をガリラヤ湖に吹き降ろすことが時折あるのです。特に夕方は山上の空気が急に冷えて、急激な突風をもたらすのです。漁師たちもそれを知っていましたが、よりにもよって、イエスと共に舟に乗ったこの時に、嵐がやってきました。舟は木の葉のように揺れました。波をかぶり、水が舟のなかに入ってきたのです。



ウジェーヌ・ドラクロワ (1798-1863) 『嵐の間に眠るキリスト』

②眠っておられる主 (38) **「ところがイエスだけは、ともなうで、枕をして眠っておられた。」**弟子たちは大わらわでしたが、イエスは昼間のお働きで疲れを覚えられたのか、舟のはしで眠り始められました。ドラクロワの絵のように、手を枕にしていたのでしょうか。それともちょうど良い枕のような部分があったのでしょうか。ぐっすりと休んでおられました。舟が大きく揺れても、何の恐れや心配もせずに、睡眠をとっておられたのです。

③溺れて死にそうです (38) **「弟子たちはイエスを起こして言った。『先生、私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われぬのですか。』**しかし、弟子たちは、嵐のなかでは落ち着いてはいられません。あわてて、イエスを揺り動かして目を覚ましてもらおうとします。「先生。このままでは死んでしまいます。私たちが溺れて死んでもかまわないですか」。漁師たちもいるわけですから、これまでの同じような経験から、より良い対応があったかもしれないのに、誰もがあわてるばかりなのです。

### 3. 自然に対する御力 (39~41 節)

①風と湖に (39) **「イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、おおなぎになった。」**弟子たちに頼み込まれて、イエスはおもむろに起き上がられました。そして、天を仰がれ、激しい風をしかりつけられました。さらに、大荒れの湖に「黙れ、静まれ」としかりつけられました (マタイ 8:26 の表現)。するとなんと、風はとまり、波も収まって静かになったのです。それは、弟子たちが考えていた方策とは全く違うものであり、その結果も理解を超えていました。

②信仰がないのは (40) **「イエスは彼らに言われた。『どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしてですか。』**イエスのお言葉は、主なる神であるキリストがそばにいても、信頼をしないで怖がる様子を戒めておられるのです。「信仰がないのは、どうしてですか」と問われると実際の苦境や、人生のあらしに巻き込まれた場合の私たちの信仰が問われていると言ってよいでしょう。「少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです」(ヤコブ 1:6) とありますが、弟子たちの信仰は自分の考えのなかにおさまるイエス・キリストだったのです。

③いったいこの方は (41) **「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。』**弟子たちは、もう一つの恐怖感に包まれました。自分たちの命は守られた一方、風や湖までに言うことを聞かせる方について、驚嘆したといっても良いでしょう。これまでも、病者をいやすことなどを見てきましたが、今回のことはスケールが大きくて、いったいこの方は誰なのだろうと考えざるを得なかったのです。

《結論》 舟の中にいた弟子たちは、私たちのこと言っても良いでしょう。今、私たちは日本という国の舟、あるいは世界という舟の中であって、揺り動かされています。大波に翻弄される舟は沈没してしまうのではないかと、という危機感を持っています。現実的に病気が高じて、命を落とした人々も相当数います。いったいこの先、どうなるだろうかと恐れや不安を感じています。高い波のように、いつ何時、自分に見えない敵であるウィルスが襲い掛かってくるかもしれないと思っています。人によっては、現実的に仕事を失ったり、大きな経済的損失を被ったりしている人々がいます。最早他人事とはいえないような事態です。最初に来た津波は小さくても、その直後に襲ってきた防潮堤を越えてくるような波が、襲い掛かってくるかもしれません。人によっては、このウィルス問題と並行する、個人の健康や仕事や人間関係、経済問題などで苦しんでいる人もいます。

あの弟子たちと同じように、「先生。私たちが溺れて死にそうなのです。何とかしてください。」と思っているかもしれません。主はそんな中でも、ともなうで枕をして眠っておられました。ここからまず学びたいのです。大変な事態の中でも、落ち着いて動じず、恐れずにいらっしゃる主イエス。ある人は言うでしょう。キリストは神なのだから、落ち着いておられるのだ。弱く力のない人間は、無力で恐れあわてるしかなく、イエス・キリストのようにはなれない、と。しかし、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」(ヘブル 12:2) とあります。とても真似はできないと思っても、キリストから目を離さずにいると、生きるヒントが示されるのです。嵐の中を泰然自若としておられる主は永遠的なこと、究極的なこと、神の愛と命の源に立っておられるのです。いかに目の前が苦境であっても、疑わずにそこに立たれるのです。一方、弟子たちは完全にそこを見失っているのです。キリストから目を離さず、「主よ。憐れんでください」と祈り、取るべき道を教えていただきましょう。

主は風と海に向かって、「静まれ！」と命じておられます。キリストは自然に対する御力を示してくださいました。私たちはここからも学びたいと思います。キリストは全知全能の創造主です。この方は人間の力、知を越え、悪の力、見えない敵をも退ける力を持っておられます。この方には、病や悪の力に打ち勝つ、大いなる力があります。「神にとって不可能なことはありません」(ルカ 1:37) とありますが、人知を越えた主の御力を信じましょう。今、あなたのうちにある恐れや不安を主にゆだねましょう。また、現実的問題や損失についても、この方が御力をもって解決して下さると信じて、主の前に出ていきましょ。自分の力や知恵に神を押し込んでしま

のでなく、私たちを遥かに変えた御力を持つ方により頼む信仰に立  
っていきましょう。

「主よ、主よ、嵐に悩む、この身を常に導きたまえ」(讃美歌 519)